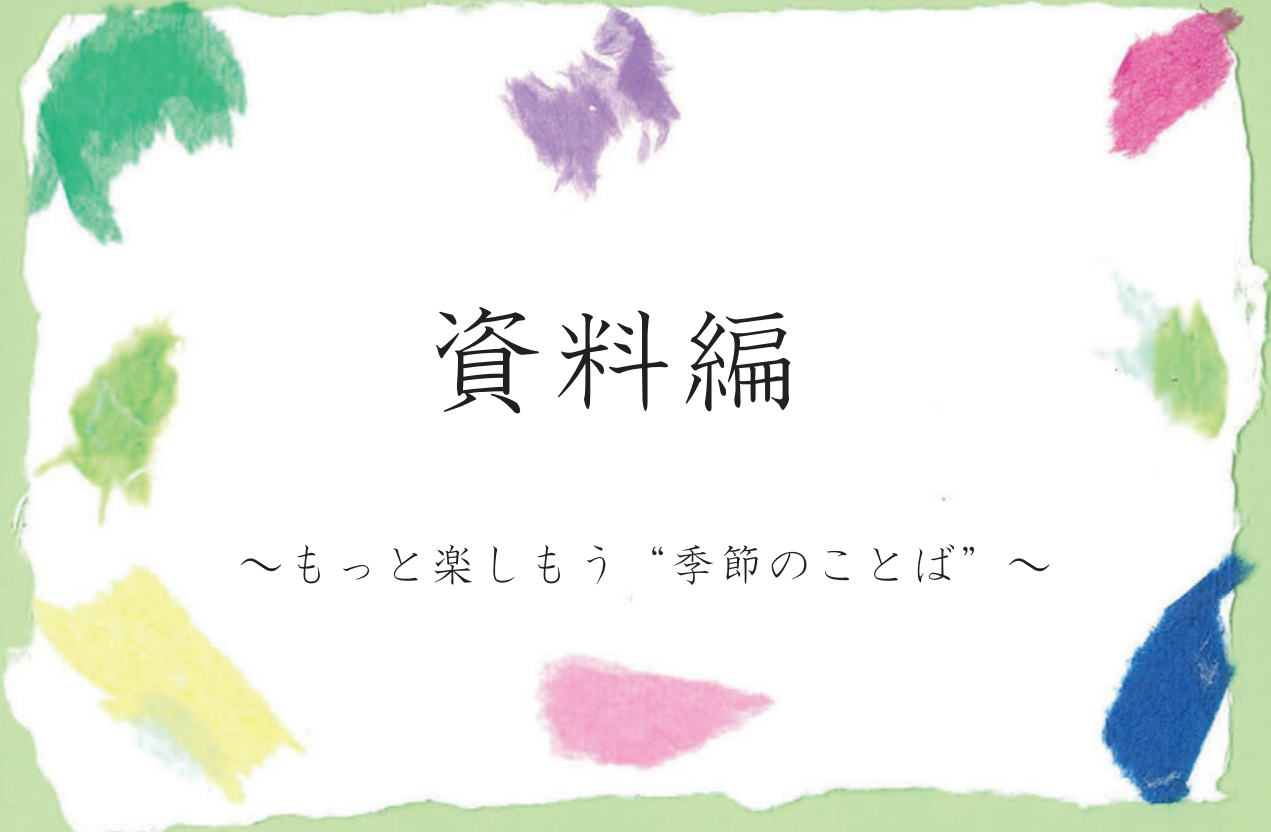




資料編

～もっと楽しもう“季節のことば”～

資料編 ～もっと楽しもう“季節のことば”～

もくじ

巻末資料1 「季節のことば36選」の詳しい解説

初詣、寒稽古、雪おろし -----	85
節分、バレンタインデー、春一番 -----	86
ひな祭り、なごり雪、おぼろ月 -----	87
入学式、花吹雪、春眠 -----	88
風薫る、鯉のぼり、卯の花 -----	89
あじさい、梅雨 -----	90
蛍舞う、蝉しぐれ、ひまわり -----	91
入道雲、夏休み -----	92
原爆忌(広島と長崎)、流れ星、朝顔 -----	93
いわし雲、虫の声 -----	94
お月見、紅葉前線 -----	95
秋祭り、冬支度、木枯らし1号 -----	96
七五三、時雨 -----	97
冬将軍、クリスマス、除夜の鐘 -----	98

巻末資料2 シンポジウム「季節が薫るひととき」の実況中継

開催内容 -----	99
主催者ごあいさつ -----	100
コーディネーターの紹介 -----	102
出演者の紹介 -----	103
二十四節気と旧暦について -----	107
会場からの質問にお答えして -----	110
まだまだ続く暦の話と新しく選ぶ季節のことばへの考察 -----	114
参加者の声 [シンポジウム終了後のアンケート回答より] -----	120

巻末資料3 公開イベント「季節のことば、今昔物語。」の実況中継

開催内容	-----	123
オープニング	-----	124
和歌に詠まれた季節感（和歌の朗読）	-----	126
季節の寄席のはなし	-----	131
日本の暦の歴史・暦をつくった男のはなし・前半く国立天文台暦計算室とは>	-----	136
日本の暦の歴史・暦をつくった男のはなし・後半く江戸時代の改暦事業>	-----	139
お天気キャスターのことばの使い方1<いつから熱帯？>	-----	143
お天気キャスターのことばの使い方2<天気予報対決>	-----	147
お天気キャスターのことばの使い方3<意味不明の用語>	-----	150
季節の言葉で遊ぼう！「お天気クイズ」気象の知識うそ？ホント!!	-----	156

巻末資料4 応募された「あなたが感じる季節のことば」の紹介

「季節のことば」を手にして	-----	157
「季節のことば」応募要領	-----	158
(1) ほっこりの季節感	-----	160
(2) 1年をめぐることばで	-----	182
(3) 暦や行事にちなんで	-----	190
(4) 花鳥風月	-----	200



巻末資料5 雑誌等に掲載された「日本版二十四節気」「新しい季節のことば」に対する議論

- (1) 「俳句」2012年8月号 記事
緊急座談会 どうなる1? 二十四節気 -----219
- (2) 月刊俳句同人誌「里」 2012年3月号 記事
峠の文化としての春夏秋冬、あるいは、「ずれ」といふ誤解について -----224
- (3) 歳時記学 第六号 記事 特集「季節のことば」と二十四節気
ズレが育んだ日本文化 -----226
- (4) 梶原しげる「プロのしゃべりのテクニック」(BPnet ビズカレッジ)
【189】得意分野でないからこそ、新しい世界が見えてくる-----228
【240】もう春、移ろう季節を言葉にして会話を楽しもう-----230
【273】NHKの正しい日本語「放送用語」さえ変えてしまう
「流行歌」のスゴイカ -----233

巻末資料6 平成23年2月～平成25年10月の動き

- 年表 ----- 237
- プレス発表資料 ----- 238
- ①日本版二十四節気～日本気象協会は新しい季節のことばの提案に取り組みます～ ----- 239
- ②日本版二十四節気 専門委員会 第1回を開催しました。----- 242
- ③第3回日本気象協会メセナ「季節が薫るひととき」を開催----- 242
- ④第3回日本気象協会メセナ 季節が薫るひととき 開催報告----- 243
- ⑤二十四節気と季節のことばに関する街頭インタビュー調査報告----- 243
- ⑥第4回日本気象協会メセナ「季節のことば、今昔物語。」を開催----- 244
- ⑦あなたが感じる「季節のことば」募集!----- 244
- ⑧日本気象協会メセナ企画にて「季節のことば36選」を選定----- 245
- ⑨「防災カレンダー 過去の重大自然災害37事例」作成～防災意識の向上と啓発を 246
- ⑩『季節のことば』『過去の重大自然災害』カレンダープレゼント----- 246

はつもうで 初詣

「季節のことば36選」

(1月)

初詣は、日本の正月の国民的行事といっても過言ではありません。江戸時代には氏神やその年の恵方にある寺社に詣でることが多かったといわれていますが、いまでは近所や有名な寺社へ出かけるのが普通です。大晦日に出かけ、日付が変わると同時にお参りをする場合もあれば、年が明けて三が日のうちに家族や友人と出かける場合もあるでしょう。

参拝者数の多い寺社に、明治神宮、成田山新勝寺、川崎大師があります。それぞれ三が日で約300万人が参拝に訪れるそうです。いずれも東京とその近郊の寺社です。東京の晴天率(1981～2010年)は、元日が86.7%、2日が76.7%、3日が80.0%。雨や雪を除くと実に90%前後の確率で傘の必要がありません。最近では、初詣のあとに初売りなどの買い物に出かける人も多く、買い物で荷物が増えることを考えると、雨や雪が降らずに済むことはありがたいですね。

かんげいこ 寒稽古

「季節のことば36選」

(1月)

「寒」がついているように、寒の入りから明け(二十四節気の小寒から立春の前日まで)の一年で最も寒い時期におこなわれる稽古のことです。

寒稽古といえば武道。「道」とつくものには技術の鍛錬のほか、精神の鍛錬も重要です。昨今、武道も競技化の波にのまれ、勝ち負けにこだわるがゆえに、効率的な技術習得を重視し、恵まれた環境で稽古をするようになってきています。寒稽古は、たしかに身体への負担はあるものの、厳しい環境に負けない気持ちを醸成させ、自分に勝つ鍛錬に繋がります。

寒中の朝、日の出前の道場を素足で歩くと、凍えて足感覚がなくなります。道場の隅にあるバケツの水には氷が張り、ぞうきん絞りで手がかじかむ経験をした方も多いのではないのでしょうか。ピンと張りつめた冷たい空気の中に、はじめは掛け声とともに口から吐く息のみが白く立ちのぼりますが、やがて体中から湯気が、弱い冬の朝日のなかに白く立ちのぼります。懐かしい思い出の光景です。

ゆき 雪おろし

「季節のことば36選」

(1月)

シベリアからの強い寒気が南下してくると日本海側では大雪になります。

季節風が強いと山沿いで雪が多く降る「山雪型」、季節風が比較的弱まると平野で雪が降る「里雪型」となります。積もった雪を屋根から取り除く作業を「雪おろし」といいますが、「雪ほり」などといっている地域もあります。とにかく重労働です。

毎冬、雪おろし作業での転落事故や落雪による事故が後をたちません。このため命綱等を使い安全を確保しながら複数で雪おろし作業をするよう呼びかけたり、自治体等が講習会を行うこともあります。

とくに高齢化の進んだ豪雪地帯では、雪おろしができずにいるお年寄りのためにボランティアによる雪おろしが増えてきています。豪雪地帯の社会問題でもあります。

せつぶん 節分

「季節のことば36選」

(2月)

節分は本来は各季節の始まり(立春、立夏、立秋、立冬)の前日のことでしたが、江戸時代以降はとくに立春(2月4日ごろ)の前日を節分というようになりました。

「鬼は外、福は内」と言いながら豆まきが行われますが、鬼払いの儀式「追儺(ついな)」や季節を分ける節分の邪気を払う行事が発端といわれています。撒いた豆は自分の数え年の数だけ食べます。

「鬼は内」という掛け声をかけるところもあります。

名立たる寺社では、年男・年女の有名人が豆まきをおこなう様子も見られます。

柊(ひいらぎ)の枝に鰯(いわし)の頭を刺して家の玄関の外に立て、棘(とげ)と臭いで魔除けとする風習も見られます。

バレンタインデー

「季節のことば36選」

(2月)

2月14日といえばバレンタインデー。バレンタインデーといえばチョコレート。男子だったら毎年、チョコレートをもらえるのかももらえないのか、ちょっとした合格発表のような緊張感を迎えます。女子は本命の男子にチョコレートをどこで、どうやって渡そうか想いを巡らせます。最近はチョコレート以外に、お酒なども流行っているとか。バレンタインデーに女子が男子にチョコレートを渡す習慣は日本独特だそうです。最近は男子が女子にチョコレートを渡す逆バレンタインもあるとのこと。消極的な草食男子が増えていると言われる昨今、積極的な男子が健在なのは頼もしいことです。

バレンタインデーでチョコレート等をもらった男子は、1ヶ月後の3月14日のホワイトデーに女子へお返しをしますが、これも日本独特の習慣だそうです。チョコレートに対してホワイトチョコやアメなどの菓子をお返しした経験がある人も多いと思いますが、アクセサリーや高級レストランでの食事に誘ったりした人も多いのでは。男を刺激させて見栄を張らせれば経済効果も高まってくるのではないのでしょうか。

はるいちばん 春一番

「季節のことば36選」

(2月)

春一番のことばの由来には諸説ありますが、一説には、長崎県壱岐の漁師が春先の強風で転覆・遭難事故にあったことからこの強い風を「春一」または「春一番」と呼ぶようになったとも言われています。

気象庁では、1951年(昭和26年)から春一番が吹いた日を記録しています。春一番の条件は、

- ・立春から春分の間
- ・日本海に低気圧がある
- ・強い南寄りの風(風向は東南東から西南西まで、最大風速8メートル以上)が吹き
- ・気温が上昇すること

としています。したがって、これらの条件を満たさないと春一番が吹いたことになりません。このため、春一番が吹かない年もあります。

「春一番」といえばキャンディーズのヒット曲。しかし「春一番」の歌詞には実際の春一番らしい特徴は出てきません。同じキャンディーズの「微笑がえし」の冒頭の歌詞が、その特徴を少し捉えています。漁師の遭難事故を引き起こすような暴風というイメージは湧いてきません。

春一番は、5月のメイスームとともに、気象災害をもたらす日本海低気圧として警戒が必要です。ちなみに、春一番があれば、春二番、春三番もあります。春一番の発生条件で強い南寄りの風が吹いた場合を発生の順番で表しています。

まっ ひな祭り

「季節のことは36選」

(3月)

3月3日はひな祭りで女の子の節句です。

ちなみに節句(せっく)とは、江戸時代から伝わる日本ならではの行事です。節句は、七草の節句(1月7日)、桃の節句(3月3日)、菖蒲(しょうぶ)の節句(端午、5月5日)、七夕(7月7日)、菊の節句(重陽、9月9日)の五節句があると言われています。

地域による違いがあると思いますが、3月3日の桃の節句(雛祭り)は、女の子の成長を祈願する行事として華やかなものとなったとも言われています。

アニメ番組「サザエさん」では、ひな祭りの時期になると、ワカメが友達を呼んだり、カツオがお呼ばれしたりと、小学生のひな祭りパーティーを見ることがあります。昭和の時代にはありましたが、最近あまり聞かなくなりました。家族でお祝いしているのか、それとも薄れてきているのか……

ゆき なごり雪

「季節のことは36選」

(3月)

何といってもイルカのヒット曲です。

もともとは1974(昭和49)年のかぐや姫のアルバム「三階建の詩」の収録曲ですが、翌1975(昭和50)年にイルカによるカバーバージョンが大ヒットしました。

作詞・作曲者の伊勢正三さんによると、実は、「なごり雪」が日本語として正しいかどうか気になっていたとのこと。ちなみに俳句の季語では「名残(なごり)の雪」として使われてきました。しかし、長く愛される曲となった「なごり雪」は今や季節を代表する言葉にもなったといえます。

さて、なごり雪の歌詞にある「季節はずれの雪」、「東京で見る雪」というキーワードで東京のなごり雪を考察してみます。

東京(大手町)の雪の終日(そのシーズンの最後の日)は、平均が3月11日です。曲が作られた昭和49年以前の10年間の平均は3月7日、桜の開花は3月30日ごろで、雪の終日と桜の開花は今と大きな違いはありません。しかし、昭和42年と昭和44年は4月17日に東京で雪が降っており、いずれも桜の満開も過ぎた時期で、まさに季節はずれの雪でした。

http://www.jma-net.go.jp/tokyo/sub_index/kiroku/kiroku/data/53.htm

づき おぼろ月

「季節のことは36選」

(3月)

空が霞(かす)んでしまうと昼間の月は見えなくなります。しかし、あたりが暗くなって月が輝き始めると、空が霞んでいてもおぼろ気に見ることができます。

月がおぼろ気に霞んで見えるのは霧(もや)に覆われたり、層状の薄い雲を通したりする場合です。気象観測では、視程が1km未満を霧と呼び、1km以上10km未満を霧(もや)と呼んでいます。空気中の水分量が多いほど視程が悪くなります。

また、気象学では「高層雲(こうそううん)」という高さ2000m~7000m程に現れる層状の雲がありますが、これを「おぼろ雲」とも呼んで月がおぼろに見える代表的な雲となっています。

にゅうがくしき 入学式

「季節のことば36選」

(4月)

欧米の入学式は秋ですが、日本では春が一般的です。また、入社式も4月の初日に行われるところが多く、まさに人生の門出となる重要な行事といえます。入学式や入社式が行われる4月初めは、九州～関東の多くの所では桜が咲くころですが、日本は南北に長く、雪が降っているところや海開きが行われているところなど春といえど地方により気候は様々です。

はなふぶき 花吹雪

「季節のことば36選」

(4月)

「花」といえば昔から桜の代名詞として使われており、「花吹雪」は満開の桜が吹雪のように散る様を指します。満開を過ぎた桜は、風速が毎秒数メートルでも花びらが乱れ散り、吹雪のようになります。「桜」といえばソメイヨシノですが、ソメイヨシノは江戸時代末期に江戸の染井村(現在の東京都豊島区駒込)の造園師や植木職人たちが育成したのが始まりで、明治以降、日本全国に広まりました。気象庁が観測している桜の開花と満開は多くがソメイヨシノです。桜は夏に花芽を形成したあと休眠して、一定期間冬の寒さを経験してから目覚めます(休眠打破)。その後の気温が高いと開花が早まりますが、寒さの経験が不十分だと開花が遅れることがあります。これらを考慮して桜の開花予想をしています。

さて、ワシントンのポトマック川の河畔に咲く桜もソメイヨシノですが、花吹雪の映像は日本の春の光景そのものです。それもそのはず、この桜は明治の終りに、アメリカの当時の大統領夫人の希望で東京市長(尾崎行雄)が送ったものです。

しゅんみん 春眠

「季節のことば36選」

(4月)

なぜ、「春眠」が季節のことばに選ばれたのか。
そもそも春眠といえば「春眠暁(あかつき)を覚えず」というフレーズが思い浮かびます。

もとは、孟浩然(もうこうねん)の詩です。

花夜處春
落來處眠
知風聞不
多雨啼覺
少聲鳥曉
浩然

(意味: 春の眠りは心地よくて夜明けにも気がつかない。)

目が覚めると、鳥のさえずりがきこえる。昨晚は嵐の吹く音がしたが、おそらく花がたくさん散ったことだろう。)

春半ばになると、気候も良くなり新入社員も少し緊張がほぐれてきますから、ちょっと油断すると朝寝坊して遅刻しますよ。

春眠は土・日の朝におさぼり、平日はしっかり早起きをしましょう。

かぜかお 風薫る

「季節のことば36選」

(5月)

風薫るといえば「5月」。5月の天候のイメージには春先からの天候が欠かせません。

「3月の強い風」と「4月の強い雨」が「美しい5月をもたらす」といわれるように、厳しい天候をぐり抜けようやく落ちついた天候へと変わってきたという印象も大きいのでしょう。5月の天候は一年中でもっとも人間にとって過ごしやすい天候だと思います。

イメージしやすい情景としては、新緑を風が吹き抜け、枝葉が揺らいでいる状況です。

こい 鯉のぼり

「季節のことば36選」

(5月)

5月5日の「端午の節句(たんごのせっく)」に中国の故事にちなんで、男の子の健康や出世を祈願して、江戸時代から飾るようになったと言われています。

「端午の節句」には、男の子がいる家庭では、兜(かぶと)を飾ったり、鯉のぼりを掲げたりします。最近では家庭で使用済みとなった鯉のぼりを集めて、ご当地の川等の河川敷などに多数の鯉のぼりを泳がせている光景が見られるところが多くなっています。

う はな 卯の花

「季節のことば36選」

(5月)

卯の花はウツギ(アジサイ科ウツギ属の落葉低木)の花の別名。または旧暦の4月である卯月(うづき)に咲く花という意味もあるそうです。

「卯の花腐し(うのはなくたし)」は、せっかく咲いた卯の花を腐らせるような長雨のことをいいます。この長雨は、桜の時期と梅雨の時期の間といわれており、梅雨の前触れが早めにやってきてぐずついた天気が続く「走り梅雨」のころをいうのでしょうか。

ちなみに、卯の花といえば、「おから」を思い浮かべる方も少なくないでしょう。おからが卯の花のように白いことからそう呼ばれる地域もあります。

あじさい

「季節のことば36選」

(6月)

あじさいは雨に似合う植物ですね。あじさいの葉に蝸牛(かたつむり)がゆっくりと動いている様子を、じっと見つめている小さな子。その子が黄色いレインコートと長靴、傘(かさ)をぐるぐる回して雨しぶきを飛ばしている様子が目にうかびます。

あじさいは、桜の開花と同様に、各気象台で開花日を観測しています。生物季節観測※では、あじさいの真の花(両性花)の開いた状態を観測しています。普段、私たちが見ているポールのような花は、大部分が装飾花(そうしょくか)で、ガクにあたります。装飾花よりも奥に隠れているのが真の花です。東京のあじさいの開花日(真の花が2〜3輪程度咲いた最初の日)の平年値は6月7日です。まさに梅雨時期の風物詩といわれる由縁です。

※生物季節観測:気象庁では、全国の気象官署で統一した基準により「うめ」・「さくら」の開花した日、「かえで」・「いちょう」が紅(黄)葉した日などの植物季節観測や、「うぐいす」・「あぶらぜみ」の鳴き声を初めて聞いた日、「つばめ」・「はたる」を初めて見た日などの動物季節観測を行っています。(http://www.data.jma.go.jp/sakura/data/)

つゆ 梅雨

「季節のことば36選」

(6月)

梅雨を「ばいう」と呼ぶ由縁は、梅の実が熟すころの長雨から梅雨と言われるようになったとか、黴(カビ)が生えやすい時期だから黴雨(ばいう)と呼ばれて転じたという説などがあります。

また、梅雨を「つゆ」と呼ぶ由縁は、露(つゆ)からという説や、梅の実が熟(じゅく)し潰(つぶ)れる時期から潰ゆ(つゆ)という説などがあります。

ばいう:「梅雨前線」

つゆ:「梅雨入り」、「梅雨明け」、「梅雨空」

沖縄の梅雨入りの平年は5月9日ごろ、関東地方は6月8日ごろ東北地方北部は6月14日ごろ。沖縄県那覇市と青森県青森市は直線で約2000km離れており、梅雨前線の北上スピードは時速2.3kmになります。一般に北海道は梅雨が無いと言われており、本州に比べて梅雨前線によるはっきりとした長雨はあまり見られません。しかし年によってはオホーツク海の冷たい高気圧の影響で1〜2週間程度は天気がぐずつき、低温が続くことがあります。これを「蝦夷梅雨(えぞつゆ)」や「リラ冷え」などとも呼ぶこともあります。

なお、西日本では梅雨の時期(6月・7月)のほうが台風期(9月・10月)より雨の量が多い傾向にありますが、東日本では台風期のほうが雨量の多いところもあります。(東京の平年の降水量[平年:1981〜2010年の30年平均]は、6月は167.7mm、9月は209.9ミリと1.25倍も多い。)

梅雨は、旧暦の五月の雨でもあることから「五月雨(さみだれ)」とも言われていました。また、どんよりとした梅雨空は暗く、「五月闇(さつきやみ)」とも言われていたそうです。関連して、「五月晴れ(さつきばれ)」は旧暦の5月(今の6月ごろ)で梅雨時期の晴れ間のことを指していましたが、今では新暦の5月の晴れにも「五月晴れ」と使うようになってきています。

ほたる ま
蛍 舞 う

「季節のことは36選」

(6月)

清流で蛍が群れとなって一斉に光を放ちながら飛ぶ様子は幻想的
です。

一時期、人々の生活様式の変化や工場の廃水により人里の自然が損なわれ、螢をはじめとする動植物が消え去りました。しかし、螢を取り戻すために、身近な自然の復活への取り組みが全国の各地で行われ、その結果、螢の舞を取り戻したところも増えてきました。

気象庁の生物季節観測には螢の初見日(しょけんび)があり、それによると螢がみられるのは6月ごろですが、西日本では5月の終わりごろからのところもあります。東北地方では7月に入ってからのもっと多くなっています。

蛍といえばゲンジボタルとヘイケボタルがよく知られていますが、日本には蛍が50種類ぐらいあり、半数ほどが光らない種類だそうです。また、成虫は餌(えさ)をとらずに水のみで生きていくため、寿命も短く1週間～3週間ぐらいです。

蛍が発光するのは交尾のためにオスがメスに合図を送っていると言われ、種類によって発光のリズムや飛び方にも特徴があるそうです。

せみ
蝉しぐれ

「季節のことは36選」

セミが一斉に鳴き、まるで木々から時雨のように降り注ぐ様子を指しています。

7月頃にはニイニイゼミが蟬のトップを切って鳴きはじめることが多くなります。7月から8月にはシャンシャンシャンと大きな音がするクマゼミの蝉しぐれか、ジジジジジジ・という音のなかにミンミンミンミンミンとアブラゼミとミンミンゼミの蝉しぐれか、カナカナカナカナカナ・とヒグラシの蝉しぐれか、音からそれぞれの夏の思い出の情景が浮かびます。そして、ツクツクボウシが泣き始めると夏もおわり秋の気配がただよってきます。

テレビドラマ(2004年)や、映画にもなった「蝉しぐれ」(藤沢周平原作)。原作が文庫本になった夏には、電車の中でも「蝉しぐれ」を読む姿が多くみられました。

ひまわり

「季節のことは36選」

ひまわりはまさに夏の花の代表です。太陽に向かって花の向きが変わるといわれています。キク科ヒマワリ属で、もともとは北アメリカ原産。日本では今や夏の花としておなじみで、種は食用としても用いられています。種類によっては、花の直径は 30cm 近く、種の数 は 1000 以上にも及び、大きな花になるものもあります。開花期は 7 月～8 月の所が多いようです。

ひまわりといえば、往年のヒロイン、ソフィアローレンが主演した「ひまわり」(1970 年公開)のラストシーンのひまわり畑の広大さと美しさが印象にあります。この映画を通じてひまわりが平和と強さの象徴とされてきたのだと思います。近年では、ひまわりを沢山植えて「ひまわり畑」を作るところも多くあり、花畑めぐり観光に一役かっています。

にゅうどうぐも 入道雲

「季節のことば36選」

(7月)

入道雲というと気象学では雄大積雲(ゆうだいせきうん)や積乱雲(せきらんうん)のことです。

夏の午後になると、ほぼ同じ方角に入道雲が見えます。

「坂東太郎(ばんどうたろう)」、「筑紫二郎(つくしじろう)」、「四国三郎(しこくさぶろう)」は、利根川、筑後川、吉野川の異名ですが、それぞれ入道雲の通り道でもあり、入道雲の名前とも言われています。そのほか、丹波太郎(たんばたろう)、信濃太郎(しなのたろう)など、地方ごとに入道雲の名前があるようです。

ちなみに、東京ではだいたい南の方角に入道雲が見えると、房総半島方面で入道雲が発生しており、千葉県内でちょっと雨が降る程度で、関東一円に雷雨をもたらすことはほとんどありません。むしろ東京の北や西の方角から利根川を下って来る入道雲(坂東太郎)は要注意で、関東一円あるいは関東南部に大雷雨をもたらします。

地上付近の空気が真夏の太陽に熱せられると、熱気球と同じ原理で空高く上昇します。上昇を続けると、次第に冷えて空気中の水蒸気(気体)が凝結して雲つぶ(液体)になります。雲つぶがたくさん集まってやがて雲になります。できたばかりの雲は「積雲」と言います。さらに空気は上昇して大きな「雄大積雲」になります。雄大積雲の高度は3000m〜5000mぐらい。すでに入道雲としてモクモクと大きな雲の塊となってあたりを見渡す大きさになります。このときは、まだ雨が降っていません。発達を続けると、やがて「積乱雲」となって雷を伴い激しい雨が降り出します。

真夏でも上空3000m以上では氷点下の気温のため、雄大積雲や積乱雲の雲の真ん中あたりの高さは雪や氷やあられを多く含んでおり、これらの存在が発雷を引き起こします。

なつやす 夏休み

「季節のことば36選」

(7月)

日本の小学校、中学校、高等学校の夏休みは、多くどころが7月下旬から8月下旬まで。寒冷地や多雪地では、夏休みの終わりが早く、逆に冬休みが長くなることもあります。いずれにしても、夏休みに入るころは、ちょうど梅雨が明ける時期であり、太平洋高気圧が日本を広く覆い、厳しい暑さが到来するころでもあります。

夏休みが始まったのは、冷房設備が無い学校では暑さのため授業が困難であるとか、農家などの家業の手伝いを行うためとか、アメリカの夏休みの影響であるとか、いろいろ言われています。社会人になると、お盆に合わせて一斉に夏季休暇をとる人が多いですが、最近では、お盆の混雑をさけるため、お盆の前後や9月に入ってから夏季休暇をとる人も多くなりました。子供が小・中学校に通っている間は、子供の夏休みに合わせて夏季休暇をとるお父さん、お母さんがほとんどだと思います。

夏休みといえば宿題の日記や自由研究で、毎日の天気をつけた人も多いのでは。毎日の天気や気温は新聞に掲載されているほか、気象庁のホームページで過去のデータを詳しく調べることもできます。活用してみてください。

げんばくき 原爆忌

ひろしま ながさき
(広島と長崎)

「季節のことば36選」

(8月)

【原爆忌（広島と長崎）】

広島と長崎への原爆投下は、世界中の人が忘れてはならない出来事です。

8月6日の広島原爆の日、8月9日の長崎原爆の日。毎年多くの人々が平和に祈りを捧げます。

広島平和記念公園にある原爆死没者慰霊碑 碑文には、こう刻まれています。

安らかに眠って下さい
過ちは
繰返させぬから

近年、広島と長崎への外国人の訪問者が増加しているそうです。

広島市・長崎市の原爆資料館を訪れば、誰もが核兵器は二度と使われてはいけなものであると実感します。

二つの原爆を踏まえ、8月15日の終戦記念日へと続きます。

二度と悲惨な過ち繰り返さないためにも、戦争・原爆で犠牲になった人々の慰霊と平和を祈念する日です。

なが ぼし 流れ星

「季節のことば36選」

(8月)

流れ星といえば一年中見ることができますが、流星群と呼ばれる流れ星の一群が見られる時期といえば、夏のペルセウス座流星群が有名です。毎年8月中旬(8/12～13日を中心に数日)のお盆のころに一番よく見られます。「お盆休みのころは、経済活動も休みで都会も田舎も空気が澄んで星がよく見えた」などと言われたものですが、このころは太平洋高気圧が梅雨明け以降、再び勢力を強めることがあり、大気も安定して晴れて上空が乾燥するため、空が澄んで見えることが影響しています。

流星群とともに、夏の大三角形も探した経験があるのではないのでしょうか。こと座のベガ、わし座のアルタイル、はくちょう座のデネブです。澄んだ夜空には、天の川もぼんやり見ることができますが、今の都会の夜空は街のあかりで夏の大三角形を見るのがやっとです。

あさがお 朝顔

「季節のことば36選」

(8月)

朝顔は秋の季語です。

朝顔といえば、7月初めに開催される入谷の朝顔市(入谷朝顔まつり)が有名ですし、夏の朝にラジオ体操に行くときによく見かけた花を思い浮かべることから、夏の花の代表として夏の季語と思っている人が多いのではないのでしょうか。

また、小学1年生の時に朝顔を育てた人は多いと思います。小学1年生が朝顔を育てる理由は、朝顔は育てやすい植物であり、朝顔の成長への気づきと、自分が朝顔を育てることができたという自分自身の成長への気づきが学習のポイントのようです。

歳時記では、朝顔が最も咲く時期は旧暦七月の七夕ごろ(今の八月終わりごろ)で、秋の訪れを感じさせる花の一つとしています。

朝顔の別名は「牽牛花(けにごし・けんごし)」。中国では朝顔の種が薬とされており、薬を贈られた人は牛を引いてお礼をしたということから「牽牛」と言われ、日本では江戸時代に七夕のころに咲く花にちなんで「牽牛花」とも言ったそうです。

ぐも いわし雲

「季節のことは36選」

(9月)

「いわし雲」は気象学では「巻積雲」と呼んでいます。巻積雲(けんせきうん)は、上空 5000~15000m くらいの高さにできる雲で、「うろこ雲」、「さば雲」も同じ巻積雲です。「ひつじ雲」は高積雲で、「いわし雲」より低い高度にできる雲です。「ひつじ雲」は季語にありませんが、「いわし雲」や「うろこ雲」は秋の季語になっています。「天高く馬肥ゆる秋」にある、「天高く」は、「いわし雲」のような上空高いところの雲が、空の高さを演出しているのではと察します。

春や秋は、移動性の高気圧と低気圧が交互にやってくることがあります。低気圧の前触れの雲として、「いわし雲」や「うろこ雲」が見られます。低気圧が近づいたがって高度の低い「ひつじ雲」などの高積雲が現れ、やがて乱層雲で雨が降り出します。低気圧の前面に広がる前線面によって上昇気流が発生し、その高さや水分の量によって発生する雲の種類が違ってきます。秋の空、「いわし雲」が広がり始めると天気はゆっくりと下り坂に向かいます。

夏の間は低気圧が日本に接近にくく、積乱雲(入道雲)が発生しやすいため、「いわし雲」はほとんどみられませんが、秋は低気圧や前線が接近して「いわし雲」が発生しやすくなることから秋の象徴の雲という印象があります。

むし こえ 虫の声

「季節のことは36選」

(9月)

虫の声といえば何が定番でしょうか。

エンマコオロギ: コロコロコロコロコロ...

鈴虫: リーンリーンリーンリーン...

キリギリス: ギースイッチョン

マツムシ: ピン・ピリリーン・ピン...

虫の鳴き声は温度に関係しているといわれています。たとえばコオロギなど秋の虫は、残暑の厳しい日中は鳴きませんが、朝晩に鳴くようになります。そして、涼しくなると日中でも鳴き出します。また、コオロギの鳴き声のコロコロ回数は気温と関係しており、涼しくなり始めたまだ気温が高い時期にはコロコロ回数は多く、かなり気温が低くなると少なくなるといわれています。このことから、コオロギのコロコロ回数から気温が分かるということです。

セミの鳴き声が止んで、聞こえ出す秋の虫の声は、耳に優しく心を落ち着かせ、涼しい秋の夜長を楽しませてくれます。

つきみ お月見

「季節のことば36選」

(9月)

お月見といえば、旧暦の8月15日の月見の行事でしょう。この夜の月を「中秋(ちゅうしゅう)の名月」や「十五夜(じゅうごや)」「芋名月(いもめいげつ)」と呼んでいます。また、旧暦の9月13日にも「十三夜」の月見を行う風習があり、「後の月」「栗名月」などとも呼んでいます。

中秋の名月は、必ずしも満月ではありません。年によっては旧暦の8月15日と満月の日が1、2日ずれることもあります。

ちなみに、月には呼び名もつけられており、十五夜を過ぎると月が東の空に昇る時刻が徐々に遅くなっていくことから、

「十六夜(いざよい)」

「立待月(たちまちづき:立って待つ)」

「居待月(いまちづき:座って待つ)」

「寝待月(ねまちづき:寝て待つ)」

「更待月(ふけまちづき:更けてから上る)」

と続きます。

く月の出は毎日平均約50分ずつ遅くなっていきますが、中秋の名月の頃はこの間隔がぐっと短くなります。連日あまり変わらない時間に月が昇ってきますので、秋は月待ちするのに絶好の季節といえます(国立天文台ホームページ「月待ちは秋に限る」より)

中秋の名月の頃は、秋雨前線が日本付近に停滞することが多くなります。秋雨、あるいは秋霖(しゅうりん)と言われる長雨の時期でもあります。日本列島を覆っていた太平洋高気圧の勢力も後退して、北からの高気圧が張り出してきて、二つの高気圧の間に前線帯ができ、日本に秋の長雨をもたらすことになります。中秋の名月が雲で隠れてしまうと「中秋無月(ちゅうしゅうむげつ)」、雨が降って見えなくなると「中秋雨月(ちゅうしゅううげつ)」などとも呼ぶそうです。雲に隠れたり水蒸気の多い夏に比べて澄んだ秋の空に浮かぶ月を待ち望んだ人々には「名月」が恋しかったかも知れません。

もみじぜんせん 紅葉前線

「季節のことば36選」

(10月)

【紅葉(もみじ)前線】

秋になると世界各地で落葉広葉樹の美しい紅葉を見ることができですが、日本の「もみじ」は、5つ以上の切れ込みがある美しい形、鮮やかな赤色が独特です。

植物学上では「カエデ」も「もみじ」も区別は無いようですが、カエデの中でも赤ちゃんの手のような葉のイロハモミジなど、5つ以上の切れ込みがありきれいに色づくものをもみじと呼ばれるようになったともいわれています。

桜前線と同様に紅葉(こうよう)前線という言葉もよく使われます(話題となります)が、日本を代表するカエデのなかまの「もみじ」、「もみじ狩り」は日本人の秋の楽しみでもあり、唱歌「もみじ」は今も歌い継がれています。何よりも「もみじ」は和語ですので、「紅葉(もみじ)前線」としました。

なお、紅葉前線は、9月に北海道の大雪山系から始まり、10月に東北地方に入り山から平野へ、また、12月はじめには関東から九州に移っていきます。10日に約500メートルの割合で山から麓に下りてきて、1日に約20キロで北から南へ南下していることになります。秋になって最低気温が8℃以下になると色づき始め、5℃以下になると一気に進み、昼と夜の寒暖の差が大きくなると色づきがよくとも言われています。

あきまつ 秋祭り

「季節のことは36選」

(10月)

秋祭りは、古くから稲作が終わって収穫に感謝する行事として行われ、人々の喜びは一年中で最高潮に達したことです。夏祭りが霊の弔いや、疫病、自然災害を鎮めるための行事であることが多く、どこことなく控えめであるのに対して、秋祭りは喜びが弾け、明るさが大きな特徴なのではないでしょうか。

日本の各地で秋祭りが多く開催される9月終わりから10月にかけては、秋雨も終わり爽やかな秋の晴天に恵まれる時期です。1964年の東京オリンピック開会式が秋雨明けの秋晴れになりやすいことから10月10日に選ばれた話は有名です。

ふゆじたく 冬支度

「季節のことは36選」

(10月)

冬支度といえば、ストーブやこたつの準備、冬物衣料の準備、冬用タイヤへの履き替え、雪吊り(積雪から樹木の枝を守るために芯柱を立て、芯柱から縄で枝を吊る)、こも巻き、干し柿、干し大根、まき割、網戸の取り外し、雪囲いなどなど。

実は天気図も冬支度をします。毎年11月1日ごろに、新聞紙面の天気図が冬用になります。それまで夏用の天気図は日本の南側を広くとり、太平洋高気圧や台風などを捉えるようにしていましたが、冬用の天気図は表示範囲を北側に広くとり、シベリアから張り出す高気圧がしっかり捉えるようにしています。

こが いちごう 木枯らし1号

「季節のことは36選」

(11月)

秋から冬に季節が移るときに木枯らしが吹きます。木枯らしが吹く条件は西高東低の冬型の気圧配置になった時であり、木枯らし1号は冬将軍の先陣といってもよいでしょう。気象庁が発表する木枯らし1号は関東地方(東京)と近畿地方(大阪)のみの発表としています。

木枯らし1号の気象条件の目安は、東京地方の場合、
・10月半ばから11月末までの期間
・西高東低の冬型の気圧配置になって季節風が吹くこと
・北寄りの風(風向が西北西から北)
・最大風速がおおむね風力5(風速8m/s)以上
です。

※近畿地方は冬至(12月22日ごろ)までを対象期間としています。
年によっては条件に見合わずに吹かなかった場合もあります。

〔最も早く吹いた記録〕

東京で10月13日：1988年(昭和63年)

大阪で10月23日：1993年(平成5年)、1981年(昭和56年)

〔最も遅く吹いた記録〕

東京で11月28日：1981年(昭和56年)、1969年(昭和44年)

大阪で12月19日：2003年(平成15年)

※データは気象庁広報室提供

大陸から吹きつける季節風は、日本海で水蒸気を補給して、日本海側で雨や雪を降らせますが、本州の山脈を越えるときに水分を落とし、太平洋側では乾燥した冷たい風として吹いてきます。関東地方では空っ風とも言っていますが、空っ風は木々の葉を落とした後の真冬に吹く風であるのに対して、木枯らしはまだ木々に葉が残っている晩秋から初冬の風と区別できるのではと思います。

しちごさん 七五三

「季節のことば36選」

(11月)

七五三は11月15日に子供の成長を祝って寺社などにお参りする行事で、今では満年齢の七歳、五歳、三歳に行くことがほとんどのようです。もともとは、数え年に行う別々の行事でしたが、ひとつにまとめて行うようになったとも言われています。

最近の七五三は、11月15日にこだわらずに前後の週末などに行うことが多いようですが、七五三の写真撮影となると、混み合う11月15日前後を避けて、夏ごろに写真を撮ってもらうこともあるとか。写真館によっては、着付けやメイクもしてくれるサービスがあり、親子で記念写真を残すことができます。親子で和装になる場合もありますので、雨に濡れずに済ませたいものです。

しぐれ 時雨

「季節のことば36選」

(11月)

晩秋になると日本海側の地方では天気がぐずつく日が多くなります。大陸から季節風が吹きだすと、日本海で次々に雲が発生し、日本海沿岸にかかるためですが、寒気がまだ弱い冬の初めは、雨や雪が降ったりやんだりして天気が目まぐるしく変わることがあります。「弁当忘れても傘忘れるな」ということわざが示しているとおりです。

また、雷や霰(あられ)を伴うこともあります。雷の発生には霰の存在が重要な役割をしており、雷雲の中に霰を多く含み、激しい対流があるほど静電気が蓄積されて発雷します。日本海側の冬の雷は、夏の雷と比べて雷のエネルギー(電荷量)が大きく、送電施設や風力発電施設などが被害に遭うことがあります。

地域によっては、ブリの取れる時期と重なり、この雷を「ブリ起こし」とも呼んでいます。ちなみに、雷おこしは浅草で売られている菓子の名前です。さらに、「しぐれ煮」の名前の由来として、三重県桑名市の名産である「時雨蛤(しぐれはまぐり)」があります。様々な風味が口の中を通り過ぎることから、あるいは、蛤が時雨の降る時期においしくなるから、とも言われているそうです。

ふゆしょうぐん 冬将軍

「季節のことば36選」

(12月)

天気予報の解説で、シベリアからの寒気団のことを冬将軍と呼び、日本ではすっかりおなじみの存在となりましたが、冬将軍の由来はナポレオンに関係しています。1812年にナポレオン率いるフランス軍がロシアへ遠征した際に、飢えと寒さが原因で敗走したため、ナポレオンが冬将軍に負けたと報じられたことが始まりと言われています。ちなみに冬将軍はもともとは General Frost(霜将軍)で、なぜ冬将軍と訳すようになったのか分かりません。

冬季のシベリア付近を中心とするユーラシア大陸には、寒冷な高気圧が勢力を広げます。西の端は東ヨーロッパ、東の端は日本まで達します。一方、アリューシャンで低気圧が発達するとシベリアの高気圧とアリューシャンの低気圧との間で大きな気圧差が生じます。いわゆる西高東低の冬型の気圧配置となり、シベリアから日本列島に季節風が吹きだします。それとともに寒気が南下して、日本海側では大雪となります。寒気が波状的に日本付近に押し寄せると、日本海側の雪の量がさらに増えて豪雪となるわけです。

季節を先取りしたいという日本人の季節感からでしょうか。「冬将軍」という言葉は特に強い寒気が襲来しはじめる初冬から年末年始にかけて言われることが多いです。しかし、寒気が安定して覆ってしまう真冬には次第に使われなくなってきます。

クリスマス

「季節のことば36選」

(12月)

クリスマスセール、プレゼント、イルミネーション、クリスマスソング、ケーキ……。今や日本でも年中行事として定着してきました。以前は街中のクリスマス飾りは12月に入ってから見かけることがほとんどでしたが、最近では11月中にはクリスマス一色になり、クリスマス商戦の早期化が伺えます。ホワイトクリスマスはロマンチックな気分にはさせますが、戦後の東京では、クリスマスイブ(12月24日)、クリスマス(12月25日)ともに、雪が降った年は3回(1965年、1970年、1984年)だけ。一方で日本海側では雪のことが多く、クリスマス寒波がやってくると、クリスマスなんてロマンチックな気分ではなくなるのでは。

クリスマスが過ぎると、一気に正月飾りに早変わり。この変貌ぶりも季節の風物詩でもあります。

じょやかね 除夜の鐘

「季節のことば36選」

(12月)

除夜の鐘は12月31日の夜から元旦にかけて寺院で鐘をつくこと、またはその鐘の音のことを指します。除夜の鐘を108回つく理由として、108の煩惱(ぼんのう)を除去して新年を迎える意味をこめていると言われています。108の煩惱とは、仏教用語である「百八煩惱」で人間の過去・現在・未来に渡るすべての迷いをさしています。

なお、除夜とは除日(じょじつ)の夜、つまり旧年を除く夜で大晦日(おおみそか)の夜の事です。旧暦では毎月の最終日を晦日(みそか)と言って、その年の最後の月、つまり12月の晦日を大晦日といっていました。

最近では、一般の人でも除夜の鐘をつくことができるお寺があり、108回以上もつく場合もあるようです。大晦日の夜は、鐘をついたり、鐘の音を聞いて、一年を振り返って反省し、迎える新しい年が幸福であることを願う日本の国民的行事と言えます。